

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと「風」

第十八号（二〇〇七年十一月）

「朗読舞」＝ふるさとの新しい表現文化

近藤治平

パントマイムを単なるパフォーマンスから演劇表現として確立したフランスのマルセロ・マルソーが亡くなった。

四十数年前のまだ演劇青年だった頃である。来日公演があり、確か御茶ノ水のアテネフランセだったろうと記憶しているが、演劇青年の何名かがマルソーのご招待を頂き、彼のパントマイムを観た事があった。今ではパントマイムの定番となっているガラスの部屋の演技に、ピエロの扮装でのマルソーの表情の作り方の見事さに衝撃を覚えたことをいまでも鮮明に覚えている。ピエロの独特なメイクアップでは微妙な表情は難しいのであるが、大雑把な喜怒哀楽の表情を繋いでいく間の中に千変万化の表情が込められてあったのだった。

聾啞者の小林幸枝さんに出会って、手話言語を舞いにするという新しい発想の舞台表現を思いついたのは、マルソーから受けた衝撃が頭の片隅に焼きついていたのでなかったのではなか、とマルソーの訃報を聞いて思い当たった。

朗読を舞い演技に表現してみようという発

想は、小林さんと会う以前から持っていたのであったが、手話言語を舞いにするという発想は小林さんに出会ったことで生まれたものである。

朗読に手話の演技を織り交ぜてふるさと物語を朗読劇のような形で表現することは、小林さんに出会う以前から、ふるさとルネサンス劇団「しゅわーど」で実験的に行ってみたのであったが、これは従来から行われている手話パフォーマンスとしての手話劇に変わるものではなかったし、表現としては面白いものではなかった。バリアフリーを掲げて朗読劇を観てもらおうとスタートした市民劇団であったので、朗読の手話通訳に少し演技を加えるという程度のものであった。

手話の表現が、既成の舞台表現を突き破った全く新しい舞台表現「朗読舞」になる、と発想させてくれたのが小林さんの手話表現に出会ったからである。

日本語というのは、世界に例を見ないほど、曖昧表現の多い言葉である。しかし、このことが和歌や俳句に代表される独特な文学や、能だとか人形浄瑠璃といった日本独特な演劇表現を生んだといえる。特に人形浄瑠璃では、極端に制約された動作や表情にありながら、言葉の説

明演技を避けて（超えてと言った方が正しいだろう）言葉と言葉の間に存在する心の襞を美事に表現している。曖昧で暗示的な日本語であるからこそ生まれてきた表現であると思う。

曖昧で暗示的といわれる日本語ではあるが、日本というふるさとの文化を紡ぎだす言葉として大切に考えていきたいものである。しかし、この日本語、聴覚障害や音声障害を持つ人たちの言語である手話にはとても厄介な言葉である。現代手話の発祥の地であるフランスなどでは、実態は知らないが手話言語の確立の高さはあるだろうけれど、日本語に比較するとはるかに音声言語に整合しており、健聴者との大きな差の無いコミュニケーション言語になっているのだと思う。

小林さんに初めて入団希望者として面談したとき、たまたまNHKのテレビに石岡を紹介する番組があつて、そこで「しゅわーど」がふるさとを詠んだ詩の朗読に手話通訳を入れた表現を披露することが決まっていた。それで演技通訳する団員の手話を小林さんに見てもらったのであった。その時に、彼女が手本として見せてくれた手話の表現に、日本語の曖昧表現を埋める動作表現のスケール感があることを発見したのであった。発見のショックは、マルソーのパントマイムを見たときと同様のショックであった。実際その時、私の受けたショックとは、何だこれは！？であった。

小林さんが分かり易い様にとゆっくりと通訳してくれた手話表現が、流れる舞になってい

たのであった。それは私の知る手話ではなかった。

彼女にはこれまでに演劇経験は全くなく、単純に分かり易くゆつくりと通訳してくれたのであったが、その表現にはすでに何年も経験を積んだ俳優と同様の、天性の舞台スケール感を手話表現に持っていたのであった。一番のシヨックは、詩という最も日本語的曖昧さと暗示性の大きい飛躍をもった言葉の表現において、単語と単語の間に存在する「飛躍の間(ま)」に彼女の表情・動作が曖昧さと暗示性を埋めてしまう舞いとしての表現を持っていることであつた。

「明日からいらつしやい！」

私の彼女に言った第一声だつた。

近年、手話パフォーマンスと呼ばれる表現が聴覚障害者や手話を学ぶ人たちの間で盛んに行われるようになってきた。手話パフォーマンスの公演も各地で行なわれている。このことは手話を普及し、手話を楽しむという点に於いては大いに歓迎すべきことであるが、舞台芸術としての視点から眺めると、既成を突き破るものではない。

他人の趣味に水を差す気は全く無いのだが、手話合唱だとか手話劇を文化祭などのサークル発表でよく目にするのだが、文字言語や音声言語を直訳に手話言語に置き換えて行なっていることに非常に違和感を覚える。単語としての手話の無いときには、指文字にして唄ったり演じたりしているが、この人たちは何故音声言語を手話言語に翻訳して表現しないのだろうかと不

思議に思う。特に酷いのが手話での合唱などである。文章に紡がれた詩の心を汲んで手話言語に翻訳しないで、五十音を単純に手話に置き換えているのである。

如何に語彙が少ないからと言って、翻訳をせず指文字に変えてしまつたのか理解に苦しむ。これは手話言語の固有の文化を無視することになると思うのだが、私の勝手な見方であろうか。

さらには、詩の心を無視した歌の表現では、作詞家に対しても失礼な話だとも思う。

しかし、この様な思考があつたことで、小林さんに出会つて、日本の古典芸能である能や人形浄瑠璃(文楽)などをヒントに手話という言葉と舞という表現様式に乗せ、朗読という音声言語とのコラボレーションで、朗読舞という全く新しい舞台表現を思いつき、創出できたのである。

語彙の少ない手話ではあるが、聾者の人達の物事を心に受け止め、それを表現する感性の繊細さは健聴者に遥かに勝るものがある。

今は未だ発展途上ではあるが、歴史の里を自称する石岡にはふさわしい、新しい表現文化であるうと思つている。朗読舞という表現様式自体は石岡にこだわるものではないが、小林さん自身が石岡に生まれ、石岡に育つてることが、個人的には気に入つている。だから彼女の演じるものは、この常世の国と呼ばれる風景や伝説をモチーフにした創作物語であるべきだろうと思つているし、彼女にとって最も相応しいだろうとも思つている。そして、この朗読舞を石岡

の新しい文化として広く発信して行きたいとも思つている。

幸いなことと言つべきか、或いは不幸なことと言つべきか、小林さんの朗読舞を評価してくださる方の多くは、地元の人ではない。特にこの常世の国が気に入つて移り住まれた芸術家の方達の評価が高い。

おそらく小林さんの表現の中に、自分の気に入つて移り住んできた風土のよさを感じ、見出しておられるのではないだろうか。

彼女の舞い表現の中で、特に万葉集の筑波山を詠んだ恋歌の舞いに高い評価をいただけるのは、そんなこともあるのではないだろうか。

手話というのは動作言語であることから、このふるさとの風を感じながら大らかに手話すれば、それ自体がふるさとの舞いになる。小林さんには、手話を離れてイメージ優先に舞い始めると厳しくダメ出しをする。単なる舞だつたら日本全国名手が大勢いる。小林さんの舞いの素晴らしいのは手話の言語で舞つことであり、その手話言語での舞いであるからこそ、手話の全く分からない人にも、日本語の誇るべき曖昧の溝を埋め尽くしてくれ、感動を与えてくれるのである。

朗読舞の確立を目指しながら、小林さんに本格的に指導を始めて二年余りでもあり、未だ発展の途上である。しかし、今、こんな風に思つている。歴史の里とは言つても歴史では飯が喰えん、と足元の暮らしの文化の大事を踏み潰して嘆くのであれば、せめて新しく生まれたる

さとの文化の芽を応援し育ててみては、と。

そして、まだまだ先の話ではあるが、密かにこんなことを夢に考えている。国衛のあったこととのみ歴史を自慢し、傲慢とは言わないがそれに近い感覚を持つこの石岡において「盛者必衰のことわりをあらわす。おこれる者もひさしからず、ただ春のごとし。たけき者もつひにはほろびぬ、ひとへに風のまへのちりに同じ」に知られる平家物語を、縦に横にと捻じ曲げて、新説・珍説の常陸国平家物語として朗読舞に演じてみようかと。

九月のことは座特別公演では、ギター文化館の協力を得て、平家物語の前哨戦ではないが、石岡府中城跡に伝わる「鈴が池、鈴姫の伝説」をその裏物語として書下ろしたものを、フラメンコギターの演奏とのコラボレーションで朗読舞劇に演じた。

そして、先月十月の定期公演では、柏原池に伝わる龍の美女化身伝説を、美女に化身するのは龍ではなく佐志能神社の白い守り猫であったと珍説に書下ろした新説柏原池物語を、二年前にこの常世の国が気に入って越してこられたオカリナ奏者の野口さんを迎えて、土笛（オカリナ）の風に乗って小林さんが舞い演技を行なった。とても楽しい舞台であった。

平家物語も、珍説、新説を与えて母なるふるさとの風としてオカリナと供に語り舞い演じるのも楽しいことであろうと思う。

ふらりと三年ぐらいの腰掛の積もりをやってきた石岡ではあったが、小林幸枝さんという人

と出会い、手話を基軸とした舞演技をもとにした「朗読舞」という新しい表現を創出することで、兼平ちえこさんというふるさとの風を色に刷く作家を取り込み、常世の国の五百相を舞の背景画として挑戦していただき、またギター文化館を発信拠点と置いたことで、ギター演奏の応援をつけ、次には母なる大地の温もりの音、土笛奏者の野口さんとのコラボレーションが生まれてきた。

朗読舞がふるさとの新しい文化となるには、まだまだ時間が必要であるが、声に叫ぶことのできない小林さんのスケール感ある舞の言葉が着実にふるさとの文化としての心を広げているといえよう。

先が楽しみである。

かつて生前に今東光氏が平泉に入られたとき、拝観に来た人たちに向かって快活な大声で、十分な拝観料を払わぬ奴にはご利益はないぞ、と公言したに倣うわけではないが、今応援しない者どもには、ふるさとの歴史文化を口にすることはできぬぞ、と大声したいものであるが、今東光氏程に肝が据わっていない小者であつてみれば、せめて小紙に風呂敷を広げるに留めるしかない。

しかし、先が楽しみである。

打田昇三 ふるさと「風にたずねて」() ()

小紙に毎月連載されている打田昇三氏の「ふるさと歴史探訪」が二冊の小冊子にまとめられて、ふるさと風の文庫として発売することになりました。(二冊組：1000円)
小さな手作りの文庫本ですが、風の会のふるさとを思う心が一杯の本です。
購読をご希望される方、下記会員までご連絡ください。手作り本ですので、少し時間のかかる場合もありますので、ご容赦下さい。

ふるさと風の会では「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。
入会希望の方、下記会員まで連絡下さい。

白井啓治 0299-24-2063 打田昇三 0299-22-4400 兼平ちえこ 0299-26-7178
伊藤由美子 0299-26-1659
編集事務局 〒315-0001 石岡市石岡13979-2(白井方)

「すまじきものは宮仕え」という諺がある。組織社会では良い上司に出会ったのと、質が悪かったりツイテない上司に遭遇した場合とでは天国と地獄の差が出てくる。昭和40年代に、当時、文芸評論家として活躍されていた白井吉見さんの「日本語と日本文学」という講演を聞いたことがある。大筋は「日本語は意味が曖昧で暗示的である。だからこそ、源氏物語、徒然草、和歌、俳句のような感覚に優れた文学が生まれた」という話だったが、その中で「自身が陸軍少尉として赴任中のサイパン島で起こした失敗（成功）談を披露された。

軍隊なので指揮官の「統率方針」が示される。社長の経営方針のようなものである。部下は異議を唱えることが出来ない。軍隊では尚更である。白井少尉が属する部隊長の統率方針の中に「積極的任務の遂行」というのがあった。文学専攻学生あがりの白井少尉は、それが気になっている。或る時、将校の集まりがあり、少し酒も出たので気が大きくなった白井少尉は『積極的任務の遂行』という言葉はおかしい。こんな日本語は無い。『任務の積極的遂行』ではないか？」と部隊長統率方針に文句をつけた。この話が部隊長の耳に入った。酔いが醒めて同僚から忠告された白井少尉は「シマッタ！」と後悔したが、もう遅い。早速、部隊長から呼び出しが来た。ビクビクしながら部隊長の前に畏まったのだが、この将軍が出来

た人物で「成る程、君の言う通りだ。統率方針を直そう」と言ってくれたのである。そのことがあってから白井少尉は部隊長付き将校に抜擢され、結果として終戦まで生き長らえることが出来た。もし、これが逆の上司だったら、翌日には戦死させられていたかも知れない。

ツイテない主人のために「任務の積極的遂行」に努めた拳句、奥州・衣川の合戦で全身に矢を受け針鼠のような姿で「立ち往生」をしたのは武蔵坊弁慶である。京の五条の橋の上、大の男の弁慶は、長い薙刀振り翳し牛若めがけて斬りかかる。強盗まがいの名刀蒐集に失敗して源義経の家来になったのが運の尽き。その上、石岡の伝説では「常陸国分寺の雄鐘、雌鐘（霞ヶ浦の沈鐘）」という話の中で、釣鐘を盗み出したのは大力の大泥棒か、弁慶かと言われている。話の内容は石岡駅のホームにもモザイク壁画で展示されているほど有名だから「濡れ衣」を晴らすのも容易ではないが、さすがに文化都市・石岡は弁慶の無実を証明するため鐘が無くなった事件の真相を「石岡市誌」に追記している。それに依れば国分寺の雌鐘は江戸時代まで在ったようで松平氏（水戸支藩）の前に府中（石岡）藩主だった皆川氏が、恋瀬川に堤防を築く工事で合図用に国分寺の釣鐘を使い、その俣に放置して返納しなかったために盗まれたとか。河川工事は大切だが、他人から借りたものを返さないのは論外の行為である。ましてや当時の藩主・皆川山城守隆庸（みなが

わやましろのかみたかつね）は大番頭（おおばんがしら）という幕府の要職を長く勤めていた。

大番頭は大御番頭とも呼ばれる徳川幕府の代表的武官である。合戦時には先鋒として働く本戦闘力の中核になる。部下の大番に任命される旗本でさえも家柄と武芸とを以って選抜されるというエリート集団の長が大番頭なのである。その任務は江戸城、大阪城、二条城の警護と江戸市中の巡回警備、大番頭の勤務交代に際しては、將軍自らが慰勞の言葉をかけるといふ名譽の大役である。

その当事者が、名刹・常陸国分寺の釣鐘を借りたままネコババしてはいけない。尤も近代でさえ悪事を働くのは下々の者とは限らない。怪しい上司がいたら「管理者の勤務実態」とでも書いたノートをチラつかせておく必要がある…

多分、釣鐘の祟りではないか？と思われるように皆川山城守の家は息子が府中藩主を継いで間もなく病死して跡目がなくお家断絶となった。因果話だとこれで終るのだが、実はこの皆川氏とその同族は良かれ悪しかれ府中、つまり昔の石岡に深い因縁がある大名だった。「今更、そのようなことを言われても、石岡の景気が良くなる訳でも無いのだから…」と怒られそうだが、昔の出来事というのは面白いもので一見して何の関係も無いように何処かに繋がっている。「歴史の里」には老舗の骨董品屋さんを覗くような感覚で訪れてくれる人たちも多いようだ

が、例えば旧石岡地区でも国分寺は普通のお寺、国分尼寺は草っ原、鹿の子遺跡は高速道に埋まり、見る影もない柏原、見所のない大古墳、龍神山は碎石場、風土記には無い風土記の丘、無意味な獅子の大頭、国衙（こくが）の跡は小学校、何処にでも在る陣屋門、祭りのための総社宮、終わった後はゴミの山、総社宮の原点だった北向観音堂は地元が守り、府中城跡はビルの廃材で埋まり、築かれた土塁は沈黙し、貴重だと思われる石岡城跡・茨城廃寺跡には剥げかけた看板だけ、廃寺の礎石が変な場所であり、条里制の遺構は壊滅状態、古代の道路は誰も知らず、昔の地名は忘れられ、茨城郡衙（ぐんが）跡は未発見のまま、常陸国府の草創期に創建された由緒ある寺社は無くなって跡さえ知らされず、一部が地元住民の好意で細々と存続している状態である。遺跡への案内板は中途半端、辿りついても公衆トイレや観光駐車場不足で、食事や買い物をしたくても案内が少ないなど、文化振興、観光行政と商業活性化などの政策がバラバラのように思えるのだが：

来てくれた人々を満足させているであろうか心配になる。由緒正しい町だから勝手に来て見ていけ」では、いくら小細工をしても何の特性もない都市の「町興し発展」にはならない。石岡が古い都市なのは確かだから、皆川氏を引き合いに出したが、せめて他にも在りそうな隠れた因果関係などを明らかにしておけば、それが石岡の苔になるのではないか？勝手にそう考えて面倒な話を展開させて頂く。失礼はお許しを。欧米人が日本の歴史を学ぼうとして先ず興味を持ち、そして難解に思うのは「南北朝時代」だと聞いたことがある。日本人さえこの時代の「目まぐるしさ」にはついてゆけない。半世紀以上に亘り二つの朝廷が対立して庶民を苦しめ、後の下克上、群雄割拠時代の温床となったのがこの時代である。日本の歴史で最も馬鹿馬鹿しい時代とも言われている。かつて帝国主義下の歴史教育では、「吉野朝時代」と言っており、現在の天皇家が北朝系なのに、敵対した南朝の武士たちを忠臣として扱ったから矛盾もあったが、戦後は「南北朝時代」に戻り北朝も天皇の地位を回復し賊軍の親玉だった足利尊氏も歴史上の人物に復帰してきた。単なる権力闘争として時代を見る事が出来る。

正中元年（一三二四）の夏頃から、上司にはしたくないタイプの後醍醐天皇が北条一族の鎌倉幕府に対してクーデターを起こそうと画策していた。しかし計画も杜撰で集めたメンバーも適当、さらに秘密会議なのに酒呑み優先のような集まりだったから、すぐにバレて関係者が捕まった。言い出しつべの後醍醐天皇も危なかったのだが、忠臣の万里小路宣房（までのこうじのぶふさ）が鎌倉の幕府に出向き必死に庇って事無きを得た。なお宣房の何代か前の祖先・宣孝は、石岡に縁のある紫式部と結婚して一女後拾遺集歌人・百人一首歌人・大貳の三位だいにのさんみ）を生んでいる。万里小路家は政治に疎い文科系の公卿であったが、天皇の危急を救ったのである。

後醍醐天皇の幕府に対する不満の一端には、皇室が持つ広大な領地への欲があった。皇位に就けばその多くを占有出来るのだが、天皇は二つの系統から交互に出すように後醍醐天皇が決めて、その実施を幕府に任せたまま死んでしまったから現天皇でも思いどおりにはいかなかった。自らの理想的政治を夢見る後醍醐天皇は幕府が憎い。性懲りも無く七年後にまたクーデターを画策したのである。最初の事件で天皇の代わりに服役していた日野俊基という公卿が出所してきたので今度は慎重に計画を練った。巧くいそいだったが陰謀が漏れた。

一説によれば、何を仕出かさか分からない天皇に不安を感じた守り役の公卿が密告したという。日野俊基は又も逮捕され、今度は死刑の予約が取れた。天皇にも逮捕状が出され、戒厳令同様の京都に三千騎以上の幕府軍が進駐してきた。「朕は如何にすべきか？」などと呑気なことを言っている天皇と、慌てるだけの能無し公卿が騒いでいる中で、毅然として行動したのは万里小路宣房の息子・藤房であった。先ず天皇を

女装させて中宮（第二皇后）の車に乗せ、皇位継承の証拠品三種の神器を隠し持つて脱出に成功させたのである。さて逃げ出してはみたものの行く当てがない。山間部に潜伏して奈良との境に近い笠置山中の寺に辿り着いた。本来の城ではないが岩肌に残つたの仏像が彫られた要害で屈強な僧兵が守っている。事情を説明して匿つて貰ふことになった。

一方、かねて比叡山の僧兵たちを味方にする目的で第一皇子の護良（もりなが）親王を天台宗の聖職に送り込んでいた後醍醐天皇は、自分の京都脱出に際して公卿の一人を変装させ天皇の偽物に仕立てて比叡山に行かせた。天皇が助けを求めて比叡山に来られた。一時は感激して、攻め寄せた幕府軍を撃退させた僧兵であつたが、カラクリがばれた後は大勢が撤退してしまつた。しかし一部の僧兵は笠置山に行き、幕府に不満のある武士も集まつて笠置城に拠つた。

こうして後醍醐天皇の火遊びから始まつた騒動が波及し、武士団の思惑と野心とが絡んで日本国中が戦乱に巻き込まれる時代に入ります。

鎌倉幕府執権の北条氏が無条件で悪人にされているが、北条氏は石岡ゆかりの平貞盛が祖先だとされている。源氏系ながら一族同様だつた足利尊氏が離反し、新田義貞と尊氏の子・千寿丸を擁する北関東武士団との攻撃を受けて北条一族は鎌倉に滅亡するが、その時に北条氏に従つてその場で自刃した家臣たちの数が六千八百余と伝えられている。嫌われるタイプの上司であつたならば、これだけの者が最後に殉じたりは

しないであらう。日本人特有の、天皇に逆らつたから賊だとする見方を変えなければ歴史の真実は見えてこない。ついでながら源頼朝夫人・政子の甥で鎌倉幕府第三代執権を継いだ北条泰時から三十一代目に当る人物がノーベル文学賞作家・川端康成（呼び捨て御免）だと言われている。日本史を捏造して言えば石岡から千余年経つてノーベル賞受賞者が出たことになる。

西暦一三三一年の大阪府に戻つて、仏像を退かして土嚢を積んだ程度の笠置城は一か月しかもたなかつたが、既に死刑が確定している日野俊基らが事前に説得しておいてくれたお蔭で、河内の土豪で忍者の流れを汲む楠木正成が地元赤坂城で幕府に反旗を翻してくれた。落城で再び居場所を失つた後醍醐天皇と万里小路藤房らは赤坂を目指して山中に迷つてしまつた。緊急の場合だから必死で逃げればよいものを、途中で気取つて掛け合いの和歌など詠んでいる。

「さして行く笠置の山を出でしより雨が下には隠れ家もなし」後醍醐天皇

「いかにせん憑むかげとて立ち寄ればなお袖濡らす松の下露」藤原藤房
結局は捕まつて後醍醐天皇は隠岐の島へ遷され、藤房は筑波山麓へ流された。

常陸の小田城主は、石岡の大掾（だいじょう）氏と因縁の深い小田民部大輔治久（おだみんぶのたいふはるひさ）である。常陸国南西部は後醍醐天皇が属する大覚寺統の荘園が多く在り天皇に好意的だつたから、治久は罪人として預か

つた藤房に新治郡藤沢村（現・つくば市）の一戸建て住宅を提供して客分のように扱つた。藤房は治久始め近辺の武士たちに勤皇思想を吹き込んだ。これにより七年後、北畠親房が小田城で「神皇正統記」を著すことになるのである。

この大忠臣・藤房は、やがて「建武の中興」で政権を握つた後醍醐天皇に失望した。政治家のように言っていることと実際とが全く違つ、具体的には一人の愛人の言いなりになつてしまつた天皇親政の不行跡、不公平、不行状を糺して諫言したが聞いて貰えず、遂に家出してしまつた。仕えた上司の質が悪くて苦勞したのにツイてない人生である。行方不明とされているが、どうも藤沢村に来て髪を落とし、お経を読んで静かに生涯を送つたらしい。

小田氏の祖先は、源頼朝から常陸国の守護（奥警本部長のようなもの）に任じられ、常陸大掾本流の多気義幹を策謀で没落させた八田知家である。八田氏は藤原系宇都宮一族で、藤原道長の兄・道兼から五代目になる。祖父が宇都宮座主兼下野守護だつた。「座主（ざす）」は寺を兼ねた宇都宮神社の神主である。知家の姉は小山政光に嫁いでいた。その女性が仏門に帰依して寒河尼（さむかわに）と称してはいたが源頼朝の乳母だつた関係で宇都宮（八田）、小山両氏とも頼朝に信頼されていた。八田知家が多気義幹のお膝元に領地を貰い、常陸国守護に任命され小田に城を構えて小田氏を名乗り大掾氏を圧迫したのは、平家系豪族を潰したい頼朝の意向だつたかも知れないと思う。

小山氏は、平将門事件で平貞盛と共に将門を討ちとつた藤原秀郷の直系子孫を称する豪族である。常陸大掾氏と同じように下野国に土着して大掾職や上級の職を世襲し、下野国内の広大な荘園を背景に勢力を上げていた。小山政光と寒河尼夫婦の三男坊は頼朝から一字を与えられて朝光と名乗った上で結城領を貰い結城家を興した。親戚関係にあつた宇都宮、小山、小田、結城の四豪族は、源氏の政権下で上司に恵まれた幸運を噛み締めていたのである。さらに結城朝光は、かの武蔵坊弁慶が義経と共に衣川で殺害された後の奥州征伐に出陣してその武功を頼朝に称され褒美として奥州白河などの領地も貰つた。結城氏は結城と白河に分かれて、南北朝時代には白河に居た結城宗広が南朝無一の忠臣と言われて三重県津市にある結城神社に祀られる。

やがて源氏が絶えて鎌倉幕府の権力は執権の北条一族に移り、北条氏が滅びて後醍醐天皇の「建武の中興」による親政が開始され世の中は良くなる筈であつた。しかし天皇が最も信頼する大忠臣の万里小路藤房さえも愛想を尽かすほどの幼稚な政治で、楠木正成は諦めて残つたが足利尊氏がまず離反し、二つの朝廷が出来て争う南北朝時代が到来した。やがて南北朝統一、室町幕府が出来たが今度は幕府内で京都と鎌倉とが対立、応仁の大乱を挟んで戦国時代に続く合戦が各地に起こる。関東の豪族たちは、目まぐるしく変わる権力の行方を予想しながら安物の磁石のように、くっ付いたり離れたりして、

しぶとく生き残らなければならなかつた。それに失敗すると忽ち没落に追い込まれる。

室町時代には関東の名だたる武將を「八族八館」として幕府が公認していた。順序不同だが千葉、那須、佐竹、宇都宮、小田、小山、結城、長沼（後に里見）の八氏である。石岡の大掾氏が入っていないのは残念だが、小田、佐竹に圧迫されて徐々に勢力を失い、石岡に孤立していたのであろうか。親戚だつた下野国の四氏も時代の变化で最早、他人同然、或いは敵対関係にあつたものと思われる。八族八館の中に「長沼」という姓があるが、これも小山氏の一族なのである。結城朝光が頼朝から白河を貰つたときに兄の小山宗政も、山の中ではあるが福島県岩瀬郡と南会津の村々を手にした。小山氏領である寒河荘（現在の小山市に近く茨城県にも近い二宮町辺り）の一部を相続していた宗政は、本領と奥州領を基盤として長沼氏を興した。「長沼」は相続した土地の地名だが宗政は奥州岩瀬の領地にも長沼荘の名を付けた。宗政の何代か子孫が本拠を奥羽に移して小山氏から長沼氏に変わり、南北朝時代の六〇年ほど前には山城ながら長沼城が築かれ八代ほど存続したらしい。群雄割拠の時代になると長沼氏は関東の八族八館から消えて「八犬伝」で有名な安房の里見氏が台頭してくる。長沼氏の衰退による陸奥国岩瀬郡の領地は会津の芦名氏や蒲生氏、仙台の伊達氏が支配し、江戸時代初期には幕府が接收して城が壊され、空いた場所は水戸に来る筈だつた榊原康政（徳川の重臣）が管理を命じられてい

た。

元禄13年（一七〇〇）の晩秋に、七十三歳の水戸黄門が常陸太田（西山荘）で重病になつた。現在の後楽園一帯を占めていた水戸屋敷に將軍・綱吉が見舞いに訪れ、出迎えた親族の中に未だ水戸藩の居候で自前の領地を持たない松平頼隆が居るのを見つけた。綱吉が將軍になれたのは水戸光圀のお蔭であるし、光圀にも頼隆にも義理の祖母に当る「英勝院（太田道灌の子孫・家康の命により頼房の養母となる）」は、春日の局の懇願を家康に口添えして綱吉の父・家光を三代將軍にしてくれた大恩人であるから二重の恩がある。綱吉は光圀の眼の黒いうちに恩を返さなければと領地を探させた。正式領主の居ない奥州長沼十八か村が見つかり、石岡近辺の領地と合わせて二万石が頼隆に与えられ、頼隆は水戸藩から貰っていた領地を本藩へ返した。こうして常陸府中藩が成立したのである。府中藩は主な領地である長沼に陣屋を建て代官を置いて統治した。

衰退した長沼氏の中で、現在の栃木市に城を構え頑張っていた一族があつた。

栃木は石岡と同様に国府（下野国）があつた都市である。江戸時代までは巴波（うずま）川河港の商業地として栄えていた。本来は栃木県庁が置かれる都市なのだが、東北本線が小山を抜けたため宇都宮に県都を攫われた。下野大掾職を世襲する小山氏の拠点は石岡の大掾氏と同様に国府付近だつた。それが、大きい荘園のある茨城県寄りに移り、国府近辺の皆川荘には一族

を置いていたのである。やがて皆川荘は小山系長沼氏が支配して室町時代末期から戦国時代にかけて皆川城を築き皆川氏を称した。天正元年（一五七三）、跡を継いだ皆川広照は周り全部が敵なので驚いたが、先祖が同じの宇都宮、小山から常陸の佐竹、小田原の北条など戦国の有名な人を相手に生きるために必死で戦った。

戦国の世に城一つでは経営が苦しい。第十二号でも触れたが、結局は北条氏に従っていた皆川氏は国内情勢に目を向け新聞の政治欄は必ず目を通し、成長株の徳川家康や豊臣秀吉には挨拶をしていたから、小田原征伐でも途中から一部の部下と小田原城を抜け出し、守備軍から攻撃軍に回って成功した。この辺が何もせずに滅びた石岡の大掾氏とは違っているのである。かくして下野国に君臨していた小山一族の中で皆川氏だけが生き残り、紆余曲折はあったが元和9年（一六三三）には広照の子（隆庸）が常陸府中の藩主となり国分寺の鐘を失う。

茨城郡衙跡と重なる地区に石岡城が築かれたのは鎌倉時代の健保2年（一一二四）とされている。本流の多気大掾氏は八田知家の策謀で滅ぼされ、水戸の吉田町辺りを持っていた大掾支流の馬場義幹が、頼朝から後継相続を許され、常陸国府勤務の都合から石岡に築城したのである。時代的には浄土真宗の親鸞聖人が高浜に上陸した頃で工事現場の横を通ったかもしれない。その後、何代か過ぎて後醍醐天皇が「しなくともいい活躍」をしていた時代の石岡城主は大掾高幹である。この人は基本的には足利尊氏に従

っていたようだが、他の豪族と同様に経営の都合に依って南朝にいたり北朝に替わったり、時には一旦は滅びた北条氏の復活クーデターにも協力した。下野の小山氏もそうだが国府の「大掾」という職務を持っていると、それは公的なものであり、朝廷が二つ出来て戦乱の時代になるうと統治機構が生きている限りは、南北いずれに属していても正当な肩書を持った武将などが国府を訪れた場合には大掾職が応接しなければならぬ。これは存亡の条件では大きなマイナスである。大掾高幹が渡り鳥のように南北を行ったり来たりしていた事情は察しがつく。

延元4年（一三三九）に南朝そのものだった後醍醐天皇が失意のうちに世を去ると、日本の南北戦争も南軍の旗色が褪せてくるようになった。ただ常陸国では筑波山麓に小田氏が居て霞ヶ浦に漂流してきた北畠親房を受け入れ、保険の勧誘のように近辺の武將を南朝方に誘っていたから景気は良さそうだったが結果的には親房の独り相撲らしかった。足利尊氏は重臣の高師冬（こののもろふゆ）を総大将として小田城を攻めた。師冬は石岡城にも視察を兼ねて来たようであり、城を護る大掾一族の税所氏を表彰した記録が残されているとか。

小田の城主は、家出してきた藤原藤房を匿った治久である。攻め寄せてきた足利軍（北軍）の数の多さに少しビビった。そこへ師冬から降伏すれば領土は保証し罪は問わない」とする勧誘があった。よく考えると自分が滅亡してまで南朝のために尽くす義理が無い。周りの豪族た

ちも程好い時期に降伏して幸福になっている。北畠親房も氣配を察して逃げてくれたから、小田氏も北軍になった。しかし世の中、甘くない。大幅に所領を削られ治久の息子・孝朝の代になって何とか足利氏に忠節を尽くし所領回復に努めていた。

その頃、石岡では大掾高幹の子・詮国（あきくに）が常陸国衙の後方の山に府中城を築き始めた。足利氏の政権が安定すると睨んで、大掾職を世襲する家系を北朝政権下で発展させるためである。高幹が尊氏（もとは高氏）から一字を貰ったように自分も義詮（二代將軍）から「詮」を貰い足利氏への忠節を表明していた。正平7年（一三五二）、時節はずれのように上野国で新田氏の残党が反足利の兵を挙げ予想外の勢力で幕府軍を苦しめた。石岡にも動員命令が下り、大掾氏は遙々と碓氷峠まで兵を出して戦った。この時に大将として出陣したのは父親の高幹である。家の将来のために当主の詮国を温存し、先の短い先代の爺さんが息を切らしながら出陣した。「大掾氏もやるものだ」と言いたい。

新田氏と足利氏は源氏系の同族だが、その処世術の違いとつか仕えた上司との関係で大きく差があった。鎌倉時代の草創期に、足利氏は早々と源頼朝に投資し、新田氏は「インチキ会社」と貶したのである。そのため幕府が北条氏支配に代わっても支社の平社員に甘んじ、足利氏は本社の重役になっていた。後醍醐天皇の挙兵に際して、幕府から出動を命じられた新田氏の当主・義貞は長年に亘り差をつけられてきた

足利氏を蹴落とすチャンスとばかりに、仮病を使つて戦場を離れ、比叡山に就職していた大塔宮を介して朝廷軍に加わつた。ところが、足利尊氏も北条氏を見限り後醍醐天皇側に付いてしまい、鎌倉攻めには息子の千寿丸が義貞と対等に出陣してきた。しかも北関東の武士団は、新田軍よりも有名な足利軍に加わる者が多く新田氏は悔しい思いをした。そのため、新田一族は「足利憎し」の怨念で最後まで北軍に抵抗を続けていた。どういつ繋がりか下野の小山義政は新田の残党に呼応して足利氏に抵抗する姿勢を示していた。大掾高幹の碓氷峠出陣もそのせいである。足利尊氏は正平十三年（一三八五）に死ぬが、一族の内紛に苦しみながらも室町幕府は少しずつ地方武士団を統制下に入れており、特に関東は正平四年（一三四九）、足利基氏が鎌倉に管領として着任し、東国の武将たちを動員できるようになつていた。

天授六年（一三八〇）五月、小山義政・朝政が南朝の義兵を起こして宇都宮領に攻め込んだ。その勢いが強く、宇都宮主従が三百ほどに打ち負かされたため鎌倉から七千余騎が救援に向かうと共に、石岡の府中城にも命令が来て大掾詮国は下野国へ出陣した。小山軍は祇園城に立て籠もつたが大軍に囲まれて降伏した。鎌倉の軍勢は途中で観音様か何かに参詣し、その利益で勝つたと伝えられるが七千+三百+大掾軍だから数の勝利だと思われる。ところが小山一族は翌年になると再び叛き「仏の顔も三度」を一度引かれて滅ぼされた。この騒動の根底には、

南北朝への忠義心というより宇都宮氏と小山氏による領土争いがあったようで「後太平記」には「阡陌（せんぱく 縦・横）の争い」と書いてある。これで関東の南北朝争乱も終ると思われた。

北朝というより室町幕府の鎌倉府に対する二度目の抵抗により、下野の名族・小山氏は滅ぼされた。その時に当主・義政の末子と思われる若丸が密かに戦場を離脱して行方を晦ました。既に関東一円の武士は文句を言いながらも鎌倉管領に従っている。行き場が無くなつて思いついたのは、遙か昔だが先祖を同じくし、また四〇年前前には南朝の拠点として意気高かつた常陸の小田城である。小田氏の当主・孝朝は、南朝株から北朝株に変えて大損をした父親の尻拭いで旧領地回復に苦勞していた。南朝カブレの若丸だか馬鹿犬だかを相手にする余裕はない。頼られても匿つてはくれたが謀反の誘いには乗らない。

小田孝朝の弟に五郎藤綱という武将が居た。父親の遺伝子で南朝にも少し興味があり、また兄への対抗心もあつて、いつしか若丸に洗脳されてしまった。意気投合した二人は「南朝のために一旗挙げよう」と、小田城内で密かに隊員募集を始めた。降伏後に領地を減らされ碌に給料も貰えなかつた兵士に呼びかけたところ南朝の拠点だった小田城のこと、三百ほどの軍勢が集まつた。募集結果が二十や三十なら諦めるのだから三百も揃つと勝てそうなきがしてくる。いざ挙兵とい

うことになつて小田城を乗つ取るわけにもゆかず、藤綱は兄に謀反を勧誘した。城主・孝朝が首謀者のように書いてある史書もあるが、小田氏が戦国時代まで存続したことを考えると謀反の黙認をした程度であつたらう。小田藤綱と小山若丸に従う物好きな軍勢三百余は、常陸台地に張り出して笠間への要路と柿岡盆地を見下ろす形の難台山に拠ることにした。

念のため近隣豪族の動きを確かめたところ、小田治久と一緒に南朝方で活躍し共に足利軍門に降つていた真壁顕幹が、小田氏と同じように冷や飯を食わされ鎌倉を怨んでいることが分かつた。真壁氏は常陸大掾本流の流れを汲む豪族である。二人の若者の熱い演説に「名流・常陸大掾」のプライドを取り戻した顕幹は兵糧の補給を約束してくれた。難台山麓は涸沼川の水源であるから水は大丈夫、武器は孝朝が目を買っている間に小田城の武器庫から頂いた。元中四年（一三八七）三月、「難台山挙兵」の報は忽ち鎌倉に至り、足利氏重臣の上杉

朝宗が指揮を執り佐竹、江戸、大掾などの地元豪族に出動を命じた。真壁氏も小田氏も一応は出陣したが形だけ、山を囲んだ鎌倉の軍勢は少なくて一万以上と推定される。山上の敵は三百、消費税以下だから直ぐ陥落させられる勘定だが一年過ぎても城兵は元氣、密かに間道から救援物資が運び込まれていた。

攻める主力の佐竹氏は当主・義宣（戦国時代に同名の武将がいる）が常陸国守護職であり、母親が小田氏の出、妹が孝朝の妻である。孝朝

に申し入れ孝朝の身の保全を確約して真壁氏の支援を止めさせた。補給路を断たれた難台城は翌年5月に落城したのである。小田五郎藤綱は自殺したことになるが、西茨城郡内に子孫がいるらしいから、八郷地区に残る「有明の松」伝説で落城の際に山道を逃げ延びてきた婦女子というのが藤綱の家族かも知れない。

逃げ去った城兵が多かったというが、事件の張本人である小山若丸も要領よく逃げ延び、応永3年(一三九六)に性懲りも無く古河で兵を挙げた。直ぐに負けて東北へ逃げ、そこで南朝の残党を集めて無駄な合戦をしたが今度は本当に敗れて自殺したという。この人騒がせな男が常陸国にやって来なければ石岡の歴史も大きく変わっていたので、難台山の事件で一番に損をしたのは大掾氏である。鎌倉の命令で詮国も難台山麓に兵を出したが、同族の真壁頭幹の秘密を知り積極的には攻めなかつた。佐竹と共に出陣していた那珂川沿岸の豪族・江戸通高(通房)は落城前の乱戦で斬られ討ち死にした。戦後の褒賞で江戸氏には河和田、赤尾関、鯉淵の三領地が与えられたのだが、この土地は何と大掾氏の所領だった。現在の水戸から内原に至る広大な地域である。同族真壁氏の所業と、それを黙認したことを鎌倉に知られたのである。碓井峠や祇園城などに出陣したのに領地を減らされた大掾氏は、鎌倉に居る関東管領(後に鎌倉公方と称する)足利氏に反感を抱き、鎌倉が室町幕府の將軍と対立するのに乗じて將軍に

接近し「京都御扶持衆」という格を貰う。つまり「鎌倉を相手にせず」という態度をとることになり、益々、鎌倉公方に睨まれて、応永三三年(一四一六)に起こった「上杉禪秀の乱」では、残っていた水戸領と水戸城まで失ってしまふ。騒ぎを起こした若丸の小山氏は、しばらく江戸時代まで生き抜いて、その一族が大掾氏の居城だった石岡の藩主となる。

後醍醐天皇も、南朝に拘って抵抗運動を続けた小山一族にしても、その大義名分が全く私欲の無いものかどうかは疑わしい。北畠親房が小田城で「神皇正統記」を書いたが、その目的は白河の奥州結城氏が忠臣・宗広の死後に南朝から離れてゆくのを阻止するための説と、後醍醐天皇の真似をしないように後村上天皇(後醍醐皇子)に建言するための説がある。「天皇は万民を苦しめてはいけない」という一節があるからだから後者のような気がする。

やがて神皇正統記に影響された徳川光圀が水戸藩の大事業として「大日本史」を著わし、南朝の忠臣として楠木正成らの功績を顕彰するのだが、楠木正成は朝敵 1の足利尊氏と親友だったという。正成のように義理に縛られ倒産失業を覚悟で嫌われ者のワンマン社長に殉ずるか、尊氏のように会社に見切りをつけて独立するかの違いで両者の運命が変わったのである。ただ、正成たちの活躍が見出だされたのはあくまでも光圀の個人的努力なのである。

楠木正成が旗印に用いたとされるのは「非は

理に勝たず理は法に勝たず法は権に勝たず権は天に勝たず(非理法権天)」の格言であるが、法が国家・文明社会の現代でも「天運まかせ」が一番で法が三番なのは情けない。滅亡した豪族たちの生き方を学習して、せめて良き主君、良き同僚を見極める能力を磨き後は天に祈るしかないであろうか。常陸国内に割拠していた桓武平氏の源流・大掾諸派の豪族たちは、天正18年(1590)の府中落城と共に消滅してしまった。戦国武将で常陸の名族・平氏出身だと言っていたのは小田原の後北条氏と織田信長だけである。

ことば座12月公演「緋桜怨節」

石岡市菖蒲沢の薬師堂に登る山道を、薬師古道と名付けて大名が駕籠で登るような山道にしてしまった。殿の御成りの邪魔だといわんばかりに桜の古木も首を打たれてしまった。そして今、朽ち果ててきた薬師堂の修復が始まったのだが、どうか全きを保つ修復が行なわれんことを祈っている。ことば座12月公演はそんな祈りを込めて、桜の古木に変わっての怨み節を、小林幸枝の手話語り劇をおとどけします。

12月16日(日曜日・ギター文化館午後2時開演)

ことば座 石岡市府中5-1-35

0299-24-2063 fax 0299-23-0150

コダイカンドウウマヤはどの辺りですか

兼平ちえこ

十月十六日のことでした。朝九時半、日上市から九人の皆さんをお迎えしての、歴史ガイドがはじまりました。歴史に熟知された、そうそうたる方々に圧倒されながら、幸いにも、もう一人、男のベテランガイドさんに助けられながらのご案内でした。民族資料館、国衙跡、総社宮、舟塚山古墳、さらに予定外に調査中の田島遺跡などが加わり、行程通りと焦る私に「時間は気にしないで楽しく行きましょう」と皆さんのあたたかい心の声にほっと一安心。予定のコース三分の一を残しながら案内は、無事午後三時半頃に終了。皆さんは、日上市では子供さんたちへ、ふるさとの歴史指導をなさったりパワフルにご活躍なさっている方ばかりでした。皆さんの背は生き生きと輝いていて、日立の大きな力を感じました。昼食の時でした。

「石岡のコダイカンドウウマヤはどの辺りですか」

「……私の頭の中は色々な漢字が交差して一瞬の混乱。」

「古代官道駅家」

「こういう字ですと差し出され、納得。それで、本紙第八号で紹介した鈴の宮稲荷神社を案内することになったのです。」

ヤマト朝廷は、常陸国風土記(西暦七二三年、元明天皇の詔に依じて、地方別に風土、産物、

文化等を記した報告書)が記された頃には、中国の唐、隋に倣い中央集権国家の確立を努めていた。確立の一環として、中央と地方を迅速に結ぶため駅制の整備を行なった。こうして設けられた古代の官道を駅道(うまやじ)と言い、所々に設けられた駅を駅家と称した。駅家は公用で旅する官吏のために設けた宿場であり、三十里(さと)：古代の一里は約五三五メートル、今の一六キロメートル)ごとに置かれ、官吏に供する馬(急使の用に供した駅馬、普通の用に供した伝馬：てんま)が用意され、交通管理を行なった。駅長は国司の監督を受けて駅家を管理し、駅子は馬を替え宿泊の世話をした。旅するものは、中央官庁から与えられた駅鈴(えきれい)を所持しなければならなかった。駅鈴は天皇が給するという重要性に、鈴蔵を建てて保管し、健児(けんじ)に守衛させた。鈴蔵は駅家の一隅に建てられたと想定され、駅鈴を祀った金丸町に鎮座する鈴の宮が国府駅家跡であったと思われる。

金丸町は、金丸氏(府中の名家六人の一人)居住からついた地名と伝えられ駅家と密接な関係にあったとされ、駅長は金丸氏がつとめていたのかも知れない。

「古代の官道は国府より四方面に向かっていた。国府より南は榎浦(えのうら)：龍ヶ崎市(駒馬)駅家を経て下総に至る東海道。国府から安侯(あご)：旧岩間町安侯(駅家を通り平津(旧常澄村平戸)、助川(日上市助川町)駅家を通って北え向う陸奥路。また陸奥路の別道は、安侯

より河内(こうち)：水戸市渡里)に出て、粟河(今の那珂川)を渡り、北に進んで雄薩(おさ)：旧金砂郷村大里)駅家を過ぎて陸奥に向った。東には層尼(そね)：旧玉造町泉)、板来(旧潮来町稲荷山)駅家を通って鹿島神宮に至る香(鹿)島路。西は、安侯駅家を通り大神(笠間市稲田)駅家から下野国府に向う下野路があった」

常陽芸文センター発行「常陸國風土記」の中に記載されている東海道から常陸国府へ向う官道について確認されておらず、いくつかの説があるというところを興味深く読みました。国学院大学の木下良教授を中心とした研究者たちの航空写真を使うなどして、実証的に研究したもので、旧江戸崎町下君山を榎浦駅家の所在地として、牛久市、阿見町向坪から土浦高津地区にあったとされる曾禰駅家から直線状態で石岡国府に至る。驚くべきことに古代の計画的直線官道は現在の高速道路の道筋に沿って東北へ直線状に延びており、その跡も数多く発見されているとのことでした。

古代官道駅家について追ってご連絡しますとのふるさと探訪クラブのみなさん、本紙上を持ちまして、ご連絡させていただきました。

ご案内できなかったところは、またご来市頂けると、お約束でした。どうぞお元気でおいいただける日をお待ちいたしております。

参考資料 石岡市史上巻

常陸國風土記常陽芸文センター発行

人と人の心繋ぐ 路道みち (ちえこ)

秘境

小林幸枝

以前から世界の秘境だとか遺跡に興味を持っており、お金と時間が充分にあつたら、世界一周の旅に出かけて見たいと思っていました。

写真で見ていると地球上にはこんな不思議で美事なところがあるのかと、心がワクワクさせられます。大自然の神秘の創造。人類の壮大な歴史を語る古代遺跡。

あゝあ、行ってみたいな。写真じゃなくて、この目に直接触れてみたい。そう思い始めるともう我慢ならない感じになってしまい、何もかも放り投げて出かけたくなってしまいます。

スゝ、フゝツと腹式呼吸で気持ち落ち着けた時、この石岡にも世界遺産に劣らない素晴らしい風景がたくさんあることを思い出しました。

脚本家の近藤さんに連れられて、物語のモチーフとなった風景をよく見に出かけます。それまでは、何となく見慣れた風景と想っていたものが、自分が演じなければならぬ物語の風景なのだ、改めて見直したとき、ふるさとの風景って何と素晴らしいのだろうと思えたのでした。

先日、近藤さんから十二月公演の脚本を渡されました。菫浦沢の薬師堂の下にある小さな池をモチーフに、私の怨念だとか、おどろおどろしい情念のような舞台をやってみようという希望に添えてくださり、書下ろされた物語です。

私をはじめて菫浦沢の薬師堂を訪ねたのは、風の会の皆さんと一緒に出かけるときでした。

そのときは未だ薬師古道という名前もなく、細く足元の不安定な、本当の古道でした。

近藤さんが、この薬師堂のことを知ったのは、薬師堂へむかう山道の登り口の所に、窯を構え住まわれている陶芸家の渡辺兼次郎先生から教えて頂いてだそうです。

最初は、兼平さんと一緒に登られたそうですが、その時の手付かつの細い山道と、傾いた石段の上にある薬師堂、そして薬師像に感動されいっぺんに気に入られたのだそうです。

特に近藤さんは、薬師堂の下の窪地にある小さな池がお気に入り、池の中央には小さな弁天様が祀られています。それで近藤さんは勝手に弁天池と呼んでおられました。先日、ポスター用の写真を撮りに行ったら弁天池と看板を立てられていました。

実際、薬師堂へは一度そのすり鉢状の窪地に降りてまた登った所にあるのですが、対面の窪地の上に立って池を見下ろし、お堂を眺めると、熊野古道などよりも遥かに幽玄でひっそりとした優しさを感じさせてくれます。

私をはじめてそこを訪れたのは、山桜の咲く時期で、特に美しい風景を見せてくれました。

・山桜咲く枝の見あげて薬師如来の何を思う
・石段の傾いて本堂の傾いて

薬師如来の一人静かに

このとき近藤さんが咳かかれた一文ですが、この文は私も気に入って何度か朗読舞に舞わせてもらっています。

ある時、近藤さんが、薬師堂をモチーフにし

た物語を書こうと思うが、どんな話を演じてみたい、と聞かれました。私は、何故か咄嗟に怨念話を演じてみたい、と言ったのでした。それで今年の春先に、薬師古道として道が整備されたと言っから、その様子を見ながら薬師如来と逢って物語の構想を立てようと、近藤さんにいわれ、登ってビックリしてしまいました。

足下が不安定だったけれど、とても良い感じだった山道が広々と整備されていたのでした。

近藤さんは、何でこんな新道を作ってしまったんだ、と憤慨されていました。そして、薬師堂を見下ろせる所に来た時、近藤さんは怒った大声で、「山桜の木まで切りやがって！」と怒鳴ったのでした。(私は近藤さんの声は聞こえませんが顔つきでそう分かりました)

そうしたら、先日頂いた脚本が「緋桜怨節」となっていました。私の希望通りの怨念話でしたが、山桜の古木の怨念話になっていました。

私は、世界の秘境に憧れ、いつか絶対に見に行きたいと思っています。でも、近藤さんの脚本を読んで、世界遺産と呼んでも決しておかしくない、私達のふるさとの風景を壊して、よその国の秘境や遺産に感動しても仕方が無いと気がついたのです。

十二月の公演では、ふるさとへの怨節を決して作らないように、確りとした緋桜怨節を演じないといけないと思っています。そうしないと、いつか世界の秘境を訪ねたいという私の願いは叶えられることはないだろうと思っています。

今、薬師如来様は市の補助を受けて修復作業に取り掛かっているのだそうですが、如来様の住まれる薬師堂には補助が出ないのだそうです。

古道と名付けて無残な新道を作り、薬師如来様は修復してもお堂に唐傘を差して座っているとは、何とも不思議な感覚です。

私は緋桜の名を借りて、薬師如来様の怨節を舞い演技しなければいけないのでしょうか。だつたらとても寂しい思いがします。

緋桜怨節を借りて、ふるさと応援歌を精一杯に舞い演技しようと思っています。

日々の中に呟いて一行
弓子

伊東

- ・恨み言を思いつ身に金木犀の香りふる
- ・手をかけることも無く朝顔の夏おわる
- ・ひだまりの草に虫のじつとしてる
- ・月もなく山の峰も草も動かず
- ・そばの花の畔に彼岸花のゆれている
- ・やもめになつて白しか咲かないと指をさす
- ・葦の穂 低くたれて夕陽をつる
- ・菊一面の畑に秋をみる
- ・木立もものいつごとく葉をおとす
- ・花魁草に蝶のかざり
- ・谷津田も青春も草でおおわれた
- ・そばと稲穂と彼岸花の中をいく
- ・おおわれた茂みの中に鳥居の赤がみえて

ことば座文庫

近藤治平の作品集（物語・詩文・脚本）がことば座手作りの文庫になりました。ご購入を希望されます方は、ギター文化館にて販売しているほか、ことば座へ FAX でご注文いただければ郵送いたします。

ふるさと物語

「新説柏原池物語」「新鈴が池物語」「潮の道余話」「窓辺に独り語り」

ふるさと童話

「皇帝ペンギンの首飾り」「霞ヶ浦の赤い鯨」「葉津ちゃんの大草原」「金丸わはは通り」

一行文集

「風に戯れて一行に呟く」「風に戯れて一行に呟く（06年）」

朗読舞劇

「恋瀬川物語」「古里は春の夢」「新説柏原物語（ ）」「新鈴が池物語」「奴賀比売物語」

「風貴（龍を愛したまほろばの里娘）」「緋桜怨節」

朗読舞

「風に戯れて一行に呟く（06）」「風に戯れて恋歌の呟いて」「万葉集ひたち恋歌」

「里の舞い歌」「漆黒と雑木林と星たち（原作小林幸枝）」

ことば座文庫は、手作りの小冊子ですので、FAX でのご注文の場合多少時間の要することがあります。

ことば座 〒315-0013 茨城県石岡市府中 5-1-35

0299-24-2063 fax 0299-23-0150

情けない！

白井啓治

今日は非常に腹を立てている。あまりにも情けない話を聞かされたからである。

本当は、編集後記に少し触れておこうと思っていたのだが、小紙は『ふるさとの歴史文化の再発見と創造を考える』を掲げての自由な表現紙である以上、やはり原稿として書くことが必要であろうと、編集者としてではなく脚本家白井啓治として誌すことにした。

石岡市は「歴史の里」をキャッチフレーズにしている。しかし、それを推進しなければならぬお藤元から何とも情けない、というか、かつて龍神山を砕石業者に売却したと同じ感覚の市民遺産を無視した話を聞かされた。

本当は、名指して書きたいところであるが、私への直接の話があったわけではないので、それは控えるが何とも莫迦野郎な奴だ。

九月の会報に太田尚一氏が投稿くださった『歴史の里』は何処へ行った』を掲載させていただいた。小紙の掲げるテーマに十分に合致した、大層意義のある文であったと思う。

6号バイパスに関して、歴史の里としてのあるべき姿を考えたら、現在の計画はおかしいし、バイパスとは言いながらバイパスになっていない。この計画は変更すべきである、という趣旨の内容であった。

太田氏の意見に賛成するか否かは、夫々個人の考え方によるが、正当な一つの石岡市民とし

ての考えである。太田氏に反対する別の意見の投稿があればそれも掲載させてもらいたいと思っている。しかし、今のところそうした投稿文は寄せられてこない。

太田氏は、この内容の趣旨と同様のものを新聞に投稿したり、石岡市や県に当たって質問状のような形で出されているそうであるが、その問題意識の高さと行動力には敬服する。

この太田氏の文を小紙に紹介したことで、莫迦な市職員が小紙会員の一人に、太田氏の言うようなことを聞いていたら史跡だらけの石岡にはバイパスは通せない、だとか史跡の全部を残すことは出来ない等の話を言ったそうだ。しかも、小紙に太田氏の文が掲載されていることを県に告げ口のような御注進をしたらしい。それが事実とすればますますお話にならない。

さらに、県の担当者から小紙の情報を取るようにいわれたのかどうかは分からないが、小紙は何部発行し、何処に配布しているのかと聞いたそうだ。まるで戦時中の憲兵にへつらって、物言えぬ小市民に対して言論の弾圧、統制でもしようかという低レベルな質問である。

小紙に限らないが、編集の責任は編集事務局にある。発行部数、配布先を知りたいのならは何故、事務局に連絡をしないのだ。当然のことであるが、質問の趣旨のはっきりしないことにはお答えはしない。また、表現の自由を侵すような趣旨にもお答えはしない。

今更ながらであるが、情けなく思っているので敢えて、民主主義というか自由主義といった

ほうがいいのか少しばかり迷う所であるが、その基本を誌しておこう。

『私はあなたの意見には絶対に賛成できないけれど、あなたがその意見を述べようとする時、それを阻む者がいたら私は命をかけてもあなたに、あなたの意見を述べさせる』

ということである。だから人は自由でいられ、自分を生きることができるのである。

このようにいうと、ここに書いた莫迦な市職員のような人は「そんなことは言われなくても分かっている、しかしそれは理屈であって現実には…」云々といった答えを返すものである。私への直接の話ではないので、これ以上の言及はやめるが、余りにも情けない。

蛇足のようになるが、「莫迦」とは梵語の慕何（痴の意）、摩訶羅（無知の意）から転じて出来た言葉であり「愚か」という意味である。馬鹿と書くのは当て字である。言語学者ではないので、定かなことは分からないが、おそらく尊い教えを聞いてもそれが理解できない、あるいは実行が出来ない愚かな者ということなのである。

さて、6号バイパスも先にバイパスありきではない。交通の利便性をどう構築していくかである。そして、利便性の構築は、費用対効果などといった比較論で構築されるものではない。

特に、現状を破壊することによって利便性を構築しなければならぬ道路などといったものを新設する場合、不文律の規範というべきものがある。

現状の破壊を伴う利便性の構築を図る場合、最優先すべきことは民族的、市民的な歴史・文化の現状保全である。保全とは、言わずもがなであるが「全きを保つ」ということである。

特に歴史的文化価値の判断とは、今の者が判断をするのではなく一〇〇年後、二〇〇後の人達がするもので、今の私達がすべきことではないし、断じてはいけないことなのである。

今の人が判断を下せるのは「現状を保全する」ということだけなのである。そして、「現状を保全することによってそれが、その地の大いなる遺産となり、暮らしにとって欠かせない文化となるのである。」

歴史の里とキャッチフレーズのコピーに書くのではなく、全きを保つことによって、自分達の暮らしが立つのだ、ということを実に考えなければならぬのである。

覆水は盆にかえることはないのだから。龍神山の削られていくのを見て、砕石業者が非難する声を聞くが、そうではなく砕石業者に文化遺産を売却した市が避難されるべきで、砕石業者が非難されるべきものではない。

そして、今、私達にとって最も大切なことは同じ轍を決して踏まないことである。同じ轍を踏んだら莫迦では済まされない。

さて、今月はこの「情けない！」の原稿を書いたことでページ数が半端となってしまった。この文をもう一ページ分増やさなければならぬ。文作屋だから何の苦も無いのだが、些か癩

に触る。しかし、この際であるから風の会のこと、この会報のことを少し紹介したいと思う。

「ふるさと風の会」は、もとは「ふるさとルネサンスの会」としてスタートしたのであった。

「ふるさとルネサンスの会」は、三年前に、中町商店街にある夢市場に、閉塞したふるさとをルネサンスしようとして立ち上げられた「ふるさとルネサンス塾」の卒業生が集まって作られた会であった。現在塾は、一時休業の状態であるが、何れ再開されることを願っている。

この「ふるさとルネサンス塾」の講師として小生が三年の約束でお手伝いをしてきたのであった。塾は、ジャンルを問わず、確りとしたふるさとを表現できる市民プロを育成する目的で始まったので、市民プロとしての才能のない人をふるい落とすと言ったスタンスで指導を行なってきた。結果、三年間で七名の卒業生を出すことが出来た。「ふるさと風の会」には、そのうちの四名が参加されている。

三年間で七名とは少ないと思われるかもしれないが、とんでもないことである。私にすれば七名も思っている。そして、その中から四名の人が現在市民プロとして、ふるさとを表現しているのだから、実は大変な人数なのだ。

ふるさとの歴史や風景を物語として表現する者、ふるさとの風を色に刷りて表現する者、ふるさとの物語を演技に表現する者と四人四様であるが、指導者として眞面目で見て言うのではなく素晴らしいことである。

会報「ふるさと風」の原稿も、夫々が自分の

考え、思いを確りと書いてくれていると、嬉しく思っている。たまたま指導者であったことから、取り敢えず編集事務局を預かっているが、小紙の評価は、市内よりも他市、他県の方々からの評価が高いのは、自己満足にならなくて良い事だと思っている。

特に嬉しく思っているのは、石岡は流石に歴史の古い町だけに、自分達のふるさとを大切に考え確りと表現している人たちが居られて羨ましく思う、という評価である。内弁慶でなく、外に向って自分を表現してくれていることは、指導してきたものにとっては嬉しい限りである。

先日、他市の元議員だったという方から小紙のバックナンバーがあれば頂けないかとの連絡があり、早速お送りしたところ、流石歴史の里ですと嬉しいお電話を頂いた。

また、この文を書き始めた今朝のことである。これも他市にお住まいで、八郷地区にセカンドハウスをお持ちの方から、八郷庁舎から毎月小紙を持ち帰るのを楽しみにしているとの嬉しいお電話を頂いた。

特にお電話を頂く方々の、打田昇三さんへの評価が高く、打田さんが一八〇枚を越す原稿を三度も四度も書き直しを小生に言われ、腹を立てながらもめげずに書き上げられたことが、今実を結んできたと思うと、たいした指導をしたわけではないが、自分のことのように嬉しくなる。

今、個人的にとても嬉しいことは、小会と兄妹関係にある「ことば座」の小林幸枝さんが、

この常陸の国の風景を気に入って移り住まれたプロの表現者の方達から、彼女の演じる朗読舞に高い評価を頂いていることである。

彼女の演じる脚本は、小生がふるさと筆名近藤治平として、このふるさとの風景をモチーフに書下ろしているのであるが、彼女の舞いに表現するとき、小生に不足している常陸国の風の香りを乗せてもらえることが素晴らしい。

十月の定期公演では、常陸の国の風景が気に入って、行方市浜に移り住まれた、オカリナ奏者の野口さんとのコラボレーションで朗読舞劇「新説柏原池物語」を演じたが、来年からは何回か一緒に舞台をつくらうとお話しも頂いた。

ことば座が発信拠点としている、ギター文化館での公演では、兼平ちえこさんが、舞台の背景画として、常世の国の喜怒哀楽を表現した五百相に挑戦してくれている。十月の公演では八十相を越した。風の会の皆さん、夫々が自分のやれる、自分の表現すべきことを一生懸命に行動しておられます。だからこそ、小生も「情けない！」と思うことを、ハッキリと大声でいわなければならぬと思う。

常世の国と呼ばれたこの素晴らしい国を、歴史的に考えれば一瞬としかいえない今の時間を、無策な利便性のために失わせることは決してしてはいけないことであることは、私でなくても断言できることである。

この地に暮らしを持つ者は、この地こそがまほろばの里」であることを、今一度、自身の裡

に問うて貰うことを願うものである。まほろば

常世の国の恋物語百

ことば座2008年ギター文化館での定期公演の日程が決まりました。

第6回公演	2月17日(日曜日)
第7回公演	4月20日(日曜日)
第8回公演	6月15日(日曜日)
第9回公演	8月17日(日曜日)
第10回公演	10月19日(日曜日)
第11回公演	12月21日(日曜日)

平成20年「ことば座夢クラブ」年会員(一万円)を募集しております。
詳しくはことば座事務局 0299 24 2063 fax0299 23 0150 までお問い合わせ下さい。

ことば座第5回公演12月16日(日曜日)

ギター文化館：午後1時半開場 午後2時開演
入場料3000円 前売券2500円
小林幸枝の手話語り劇「緋桜怨節(菖蒲沢薬師堂弁天池秘聞)」
朗読舞「里の舞い歌」(ギター演奏協力：ギター文化館)
ことば座 茨城県石岡市府中5-1-35
0299-24-2063 fax0299-23-0150

(はるを)

の里を散歩しながらこんな言葉を呟いてみた。
・古木に龍の声聞いた
・みわたせば思い思いにふるさとの風
・天に声して歩きたい雑木林
・ふるさとの時に漂い言葉に遊ぶ

〒315 0001
石岡市石岡13979 2
0299 24 2063
(白井啓治方)